おいでませ山口　🌸NAVI　講演会　2023 年 8 月 5 日@山口県立大学地域共生センター

地域を見つめてわかる「観光」とは――コロナ後の「観光の質」を問う

安渓遊地・安渓貴子（生物文化多様性研究所）

前回お話させていただいたのは、2022 年 2 月 19 日でした。渋沢敬三・宮本常一という先覚者を手がかりに「地域の魅力と底力」を考えてみました。お元気ですか？

最近は、石垣金星著『西表島の文化力―― 金星人から地球人へのメッセージ』の編集を引き受けて、一周忌の 2023 年 6 月 30 日に合わせて南山舎（石垣島）から発刊しました。

1.　観光の危機の中で

2001 年 アメリカ同時多発テロ、

2009 年 リーマンショック、

2011 年 東日本大震災と原発事故など、

観光客が来られなくなる事態は、いろいろありましたが、Covid-19 の影響は深刻ですね。

「観光」とは、光を観ること。その「光」とは、地域の魅力であり、危機の時に発揮される「底力」であることを、前回お話しました。

2.　地域が持続できる観光

カナダの社会学者のロバート・ステビンスさんは、「真剣な余暇」という考え方を提起しました。そこから、「真剣な観光」という言葉も生まれています。地域の関係人口となり、双住や移住につながるかもしれない関わり方を指しています。

地域の現在から未来にとっては、受け入れ/送り出す観光客の量よりも質を重視すべきだということは、コロナ禍で、ますます大切になってきました。

3. 特定の場所への愛着(place attachment)――西表島との 50 年を振り返って

観光地愛着（destination attachment）という言葉もつかわれるそうです。

世界自然遺産に登録された西表島ですが、イリオモテヤマネコやマングローブの林などの自然そのものがすごいというよりは、それが今日まで保たれてきたのは、その自然と共存を果たしてきた「島の文化の力」のおかげだったのでした。

過疎の中、土地買い占めや墓場の骨董品あらしなどで倒れかかった故郷に、1972 年 4 月、復帰の直前に島に帰った石垣金星さんは、「島おこし」運動に着手します。以下は、遺稿集の中の彼の言葉です。

> 自分たちで自分たちの地域を作っていく運動がたまたまエコツーリズムと呼ばれるだけです。エコツーリズムは、地域の自然とその自然から生まれた文化を作り上げていく文

化運動なんですよ。その文化は自然を活用し、工芸や芸能であったりするけれど、それを自慢する行動を総称してエコツーリズムと言うのです。

西表に「 自然保護」と言う言葉はもともとないわけよ。自然な恵みを減らさないように、どうすれば良いのか。その答えは 30 年先に出てくる。伝統と言うのは、その自然の恵みを減らさないようにすることであるわけよ。まつりごとも行事も全てそう。人間もこの自然の中で生きている生き物のただ 1 つにしか過ぎない、と言うことを感じないといけない。西表の場合は、自然よりも、人間が前に出たら、必ず人間の暮らしがおかしくなる。人間が自然を踏みつけにして、自然より前に出てはいけない、というのが昔からの教え。これは昔も今もこれからも、絶対変わらんし、変えちゃいかんこと（映画・生生流転から）。

４．定住・しごと・祭り

西表島には人口が増えている集落があります。明治 26 年に探検家・笹森儀助が予言した、遠からず廃村になると思われた八重山の 18 の村の中でただひとつの例外となった干立（ほしたて）です。ここでは、移住者たちが国指定の民俗文化財としての祭りや芸能をはじめ、年間に数十回ある公民館の活動の主力となっています。

山口県で合併しない道をえらんだ阿武町の海辺の宇田郷地区にある小さな漁村・尾無（おなし）は、台風被害でやめていた共同の大敷網を復活させて、捕れて 2 時間半以内の魚を道の駅に届け、山の村々でも新鮮な魚を食べるという新しい旋風を巻き起こしています。

この 2 つの例には共通点があるのでは？

いやおうなく、過疎をめざしてまっしぐらの山口県で、町で暮らして考え感じることと、田舎で暮らして考え感じることのちがいは何でしょう。

「ムラで食っていけるの？」と聞かれることが多いのですが、「なんとか食ってるよ！」逆に、「マチで生きていけるの？　こっちへおいでよ！」と伝えたいです。

参考文献

石垣金星著『西表島の文化力―― 金星人から地球人へのメッセージ』南山舎、2023 年

Googlescholar で、例えば「観光」「コロナ後」をキーワードに検索してみましょう。たくさんの文献がヒットします。「地域愛着」とか、「serious leisure」などで検索してみても、いろいろ学べるでしょう。